２８年２月研修会

「筋違道・太子道を歩こう」

資　料

奈良･人と自然の会

歴史文化クラブ
（２月１６日（火））

行程表

９：20　近鉄・田原本線・黒田駅　集合

黒田大塚古墳、孝霊神社、法楽寺、伴堂（ともんど）・杵築神社、
屏風・杵築神社、糸井神社、吐田（はんだ）・杵築神社、

中窪田・杵築神社：お祓いの後、社務所で昼食

飽波（あくなみ）神社、広峰神社、上宮（かみや）遺跡、成福寺

15 時 頃　ＪＲ法隆寺駅前で解散　（反省会：法隆寺駅前にて）

聖徳太子とその時代

聖徳太子という尊称は後世に太子信仰が盛んになってつけられたもので、太子存命中は厩戸皇子あるいは摂政宮と呼ばれていたはずである。ここでは単に太子とお呼びすることにする。当時は皇太子という制度は成立していなかったことや、様々な論拠から聖徳太子は存在しなかったという説を述べている学者もいる。

しかし当時の最高権力者蘇我馬子の業績を見ても太子が摂政になる前は見るべきものはなく、太子の摂政就任後に有名な「十七条の憲法」や「冠位十二階の制定」「遣隋使の派遣」「仏教の興隆」等が続いている。これらから私は太子と推古女帝と馬子のトロイカ体制で政治を行っていたと確信している。太子は敏達３年１月１日生まれ（５７２年）で推古３０年２月２２日（６２２年）に亡くなっているので４９年の生涯である。父は第３１代用明天皇で母は穴穂部間人皇后であり、父方母方双方の祖母は蘇我稲目の娘で蘇我氏の血が濃厚に入っている。

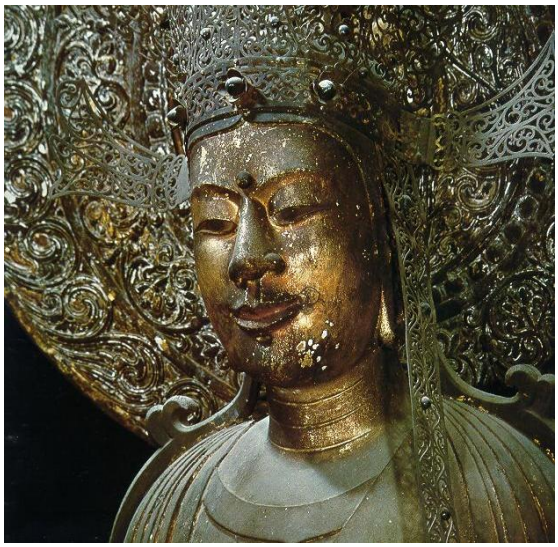
１．皇位継承をめぐる物部氏と蘇我氏の争い

用明天皇が崩御されると、皇位継承をめぐり蘇我馬子と物部守屋との間で争いが起こった。両者は仏教をめぐり対立していて崇仏派の馬子と廃仏派の守屋との戦いは宗教戦争とも呼ばれる。激しい戦いが行われたが、この戦いに厩戸皇子も蘇我系皇子の一人として参戦している。数では劣勢な守屋だが軍事氏族で兵は強く蘇我方は苦戦が続いた。この時太子は仏法守護神の四天王に戦勝を祈願し、戦は蘇我方の勝利に終わった。後に守屋の所領を没収し建立したのが四天王寺である。用明天皇の後は蘇我系の崇峻天皇が即位したが、馬子と対立したため馬子に暗殺され、敏達妃の額田部皇女が即位した。最初の女帝推古天皇である。この時女帝は３９歳で７５歳で崩御するまで３６年間帝位にあった。当時の大王家の力はぜい弱であり、皇位継承時にはしばしば血で血を洗う骨肉の争いが繰り広げられた。太子はこの渦中にあり争いを深く憂慮され仏教に救いを求められた。後に十七条の憲法を定めた時に、その第一に「和を以て貴しとなす」とされたのはその表れであった。

推古天皇は３９歳で即位され当時としては非常に長命で在位期間３６年と長きに渡り帝位にあった。この間、摂政として天皇を補佐し実質的に政務を行ったのは太子であった。馬子は大臣として絶大な権勢を持っていたが、聡明な太子は馬子の専横を許さず、仲違いもせずに政務を行った。これは書紀には記録されていないが、奇跡のようなものであった。絶対権力者の馬子に逆らった者は天皇でさえも粛清されたのである。(崇峻天皇の例)これは太子が単に聡明なだけではなく、深く仏教に帰依し馬子をも心服させる人格も備えていたからであろう。推古天皇も仏教を深く敬い、推古２年に厚く三宝（仏、法、僧）を敬うべしとの詔を出している。また、太子と共に法隆寺や四天王寺を建立して仏教の興隆を図った。

法隆寺は別名斑鳩寺とも呼ばれ、金堂の銅作り薬師如来の光背銘には用明天皇が病気平癒のため発願し、後にその意を受け継ぎ推古天皇と太子により創建されたとある。（６０７年）しかし、天智９年（６７０年）に全焼したとあり、現存する法隆寺はその後に再建されたものである。書紀には創建の記録は無いが焼けた記録はあるため、その後、法隆寺は再建されたか否かが長く論争となった。

しかし、昭和１４年に発見された若草伽藍跡が決め手となり全焼後再建されたと決着した。夢殿は太子の斑鳩宮跡に奈良時代に行信僧都が建立したものである。



夢殿の救世観音

２．当時の海外情勢

朝鮮半島は当時、高句麗、新羅、百済の三国鼎立の時代であった。倭国が半島南部の加羅(任那)に持っていた権益は５６２年の加羅の滅亡により失われていた。一方大陸では強大な隋が中国を統一（５８９年）した。推古３年（５９５年）高句麗の僧慧慈が来日し太子の仏教の師となった。慧慈より隋は優れた律令国家であり、仏教も興隆していることを聞き遣隋使派遣を決める。(推古８年６００年）一方朝鮮半島では新羅が強大になり百済を圧迫したので、倭国は推古８年（６００年）新羅と交戦し調を貢ことを約束させた。しかし、新羅が約束を守らぬため推古１０年（６０２年）再度征討軍を送ることを決定した。しかし、征討大将軍で太子の実弟来目皇子が病没し渡海は中止となった。一説には新羅により暗殺されたとの話もある。推古１５年（６０７年）の遣隋使では小野妹子を隋に派遣し有名な「日出る国の天子、書を日没する国の天子に贈る、つつがなきや」の国書を送り隋との対等の外交関係を結ぼうとした。隋の皇帝煬帝は無礼な国書に激怒したが、倭国が高句麗と結ぶことを恐れ返書を裴世清に持たせて妹子とともに帰国させた。

３．冠位十二階と憲法十七条の制定

推古十一年（６０３年）太子は隋の制度を参考にし、役人の冠位を十二に分け服務規程を定めた。頭に被る冠の色により身分や役職が一目で判るよう定めたのである。また、推古十二年（６０４年）には憲法十七条を定め政治の基本とした。

４．聖徳太子の墓

推古３０年（６２２年）に太子は亡くなり河内

の叡福寺磯長陵に葬られた。墓は太子と太子の母の穴穂部間人皇女と妃の膳部菩岐岐郎女を合葬する三骨一廟である。その復元模型が大阪府立近つ飛鳥博物館に設置されている。

５．太子一族のその後

太子の長男である山背大兄皇子は有力な皇位継承権者であったが。皇極２年（６４３年）舒明天皇崩御後の後継者争いの中で蘇我入鹿に攻められ一時は生駒山に逃れたが、再起を図るよう進言する臣下の言を退け斑鳩宮で一族全員首をくくり自害した。ここに上宮王家は滅亡し太子の血脈は途絶えた。

６．万葉集にある太子の歌

太子が片岡山（現王寺町）のあたりを通りかかった折に行き倒れた人を見かけ、哀れに思い着物を着せかけてやった。その時の御製

「家にあらば　妹が手まかむ　草枕旅に
　　臥やせる　この旅人あわれ」

太子は平安時代になり多くの人々に信仰され、慕われ多くの太子伝説が生まれた。それは仏教の慈悲に基づく政治を行い。争いのない世を作ろうとした太子の徳をしたう多くの人々がいたからである。テロの脅威にゆれる現在の我々も「和を以て貴しとなせ」の太子の一言をもう一度かみしめてみようではないか。

（文責　杉本登）

太子道（筋違道）を歩く

Ａ．太子道

1．太子道とは

太子道とは、日本の古代道路・街道のうち、聖徳太子が通られた道、あるいは広く太子ゆかりの寺へ参拝する道でその通称がつけられた道を言います。各地に“太子道”と呼ばれる道があり、主なものとしては

① **法隆寺と飛鳥地方を結んだ道**　②法隆寺から大阪府太子町の叡福寺までの道

③ 太秦広隆寺への参詣道として利用されていた道　④難波・四天王寺と飛鳥を河内飛鳥経由で結んだ道

⑤ 難波・四天王寺と法隆寺を結んだ道　などがあります。

この中で、今回歩く太子道（**狭義の“太子道”**）即ち**法隆寺と飛鳥地方を結んだ道**について述べます。

２．本来の筋違道（すじかいみち）

この太子道は、聖徳太子が飛鳥の宮と斑鳩の宮を往復されるために作られ、太子が愛馬黒駒に乗り、調子丸という馬丁を供にして日々通われたと伝えられる道であり、条里制の南北方向の地割りに斜交（北方向約20度西）している道であることから、別名「**筋違道**」とも呼ばれています。

●道路の起点：

北は法隆寺（厳密には斑鳩町「高安」）であり、南は飛鳥（推古天皇の小治田宮）です。

（勿論、斑鳩宮から高安までの道も整備されていたと思われます。）

この間の直線距離は約２０数Ｋｍです（“歩けば5時間以上”“馬の並足・速足では2時間強”など）。

●建設時期：

601年（推古9年）頃に推古天皇・聖徳太子の意向で建設を開始と考えられます。

（601年に斑鳩宮の建設を開始し、605年(推古13年)には太子は斑鳩宮に住んでいた。）

●道路の性格：

日本最古の官道(1級道路)と考えられます。

・道幅は２０ｍ強もあり、両脇に側溝が作られている（田原本町での発掘結果）。

（約６０年後に整備される上・中・下ツ道とほぼ同規模である)。

・盆地の2/3を直線的に斜めに横切る平坦な“しっかりと計画された道”である。

注１）弥生時代からの自然道をもとにしたとの考えもある

注2）613年　竹内街道を建設（丹比道を整備拡大）　653年　上・中・下ツ道を建設

３．現在の筋違道

歴史の流れに伴い、筋違道の南部にはほとんど痕跡が残っていません。北部は今でも、安堵町の約１ｋｍと、三宅町から田原本町宮古にいたる約３ｋｍほどの直線道路が、生活道路としてその形を残しています。あとは僅かに痕跡らしきものが田原本町多（おお）まで 点々と存在しています。

・筋違道衰退の主な要因：

643年（皇極）山背大兄皇子殺害・斑鳩宮焼失　710年（元明）平城京遷都 → ニーズ減少

653年(孝徳)　処々の大道を作る（上・中・下ツ道）　676年（天武）藤原京建設開始 → 太子道破壊

筋違道は、橿原考古学研究所等で行われた調査以外にはあまり発掘調査は行われていません。

今回はこの北部の生活道路を中心に歩く事にしました。

Ｂ．関連する遺跡等

●黒田大塚古墳

黒田大塚古墳は、古墳時代後期の前方後円墳である。周濠まで含めた本来の全長は 86m であるが、後世に周濠は埋め立てられ、墳丘の周囲が削り取られている。周濠の発掘調査では埴輪や木製品が出土しており、墳丘上に立て並べられていたものと考えられる。葺石は認められない。

●法楽寺

法楽寺は、由緒書によれば、孝霊天皇黒田廬戸宮（いおとみや）跡に建立され、聖徳太子開基にかかるものとされる。承元元年（1207 年）、伽藍坊舎は残らず焼失したが、貞応元年（1222 年）に再建がなされた。室町時代の盛期には堂宇 25 を数えたが、兵火で焼けて現在残るのは 1 坊のみである。本尊は子安地蔵菩薩立像。僧形地蔵菩薩坐像（室町時代）などの古い仏像も所蔵する。桃太郎のモデルの吉備津彦命はこの地で生まれたので“田原本町は桃太郎の生誕地だ”という話もある。

●孝霊神社（廬戸神社）

もと法楽寺の鎮守社で、法楽寺境内にあったのを、明治初年神仏分離で現在地に遷座した。主祭神は孝霊天皇、倭迹迹日百襲姫命、彦五十狭彦命（ひこいさせりひこのみこと＝吉備津彦命）、稚武彦命。太子道に面している。（なお孝霊天皇陵（片丘馬坂陵）は王寺町にある。）（孝霊天皇：第７代天皇で欠史８代に含まれる）

●白山神社

屏風・杵築神社の向かいにある小さな神社。聖徳太子が休憩された場所で、駒繋ぎの柳（いまは見当たらない）や太子の腰掛け石がある（なお、腰かけ石は飽波神社にもある）。

●伴堂（ともんど）と屏風の杵築（きつき）神社

屏風社と伴堂社はともに、おかげ踊りの絵馬が有名である。おかげ踊りとは、おかげ参りとよばれる伊勢神宮への集団参詣の後に近畿各地で流行した豊年祈願と感謝の踊りをいう。

屏風社拝殿には伊勢太神宮の旗を立て、40 人ほどの人たちが三味線などにあわせて踊る絵馬があり、また「聖徳太子接待」の絵馬も奉納されている。またこの神社には、太子の矢突きの井戸がある。

一方、伴堂社拝殿の絵馬３面には神社の境内で多数の踊り子が輪になって踊る様子が描かれている。

＊）２社の祭神はいずれも須佐男命である。江戸時代までの神仏習合時代にはスサノオノミコトと同体とされる牛頭天王（ごずてんのう）を祀った。（屏風社には牛頭天王社と刻んだ燈籠が残る。）明治の神仏分離令に絡み牛頭天王を本尊とする社は全て「スサノオノミコト」を祭神とする神社に変えさせられ、多くは八坂神社や素戔嗚神社と改称したが、この地域は杵築神社（出雲大社の古称との関係）とした。

＊）“屏風”の地名は聖徳太子に風があたらないように屏風を立てたなどの言い伝えに起因する。

●面塚

室町時代に、「葱」と一緒に天から落下してきたと言われる“翁の面”を祀った塚であり、今は『観世発祥の地』の碑も建っている。

●糸井神社

式内社で祭神は豊鍬入姫命。本殿は春日大社から移築（江戸時代）。この神社は古代機織り集団に関係していたと推測されている。拝殿に揚げられた大絵馬は有名。雨乞い踊りの一つにあげられる「**なもで（南無天）踊り**」や、スイカを売る屋台などが描かれており、この地方の民俗文化を伺い知ることができる。

●油かけ地蔵

筋違道添いの西向きのお堂に安置されている室町時代に造立された地蔵。泥田から引き上げて祀った。デキモノ治療に御利益があると言われ、願をかける日には油を掛ける習わし（燃灯供養）があることと、当時この付近に水害が多いため、油を掛けて水を弾くようにと言うことから油かけ地蔵と言われている。

『吐田、窪田は、水つきどころ。嫁にやっても、荷はやるな』

●吐田（はんだ）・中窪田の杵築神社

両神社は現在の大和川の河床（馬場尻橋付近）にあったが大和川大改修工事（昭和 35 年～40 年）に先立ち現在の地に移築された。中窪田の杵築神社は１１７８年に対岸吐田の杵築神社より分神移座したとある。『窪田氏神之記録写』には、「聖徳太子が橘寺（飛鳥）への道中に当社に立ち寄られた」という文章がある。また、移築後の中窪田杵築神社境内には、推古式古代人造の７重の石塔が残っています。(旧杵築神社にあったもの)。１３重石塔の一部との説もあるが…。

●飽波（あくなみ）**神社**

太子道（筋違道）沿いに位置しており、聖徳太子が休息したという伝承がある腰掛石が境内の南にある。同様の腰掛石伝承は同じ太子道沿いにある三宅町の白山神社にもある。秋祭りの雨乞い「なもで」踊りが有名。

●広峰神社

飽波神社の元宮といわれ、聖徳太子が夢で五色の雲がたなびき、霊剣が現れるのを見て、素盞嗚命が牛頭天王となって顕現したと思い宮を建て、晩年を過ごされた飽波宮跡と伝える（成福寺も宮跡と言われる）。

●上宮（かみや）**遺跡**

平成 3 年の公園建設の際に、奈良時代の宮殿クラスの掘立柱建物跡（官衙的な建物跡）や平城宮と同文様瓦のほか井戸跡が確認された遺跡を上宮遺跡と言う。現在上宮遺跡歴史公園として整備されている。その歴史公園の南に、今は廃墟と化した成福寺（じょうふくじ）がある。

●成福寺

成福寺は飽波葦垣宮（あくなみあしがきのみや）の跡地に建てられたとされ、この宮は太子最愛の妃膳大郎女が住まれていた所であり、太子が薨去された地でもある。この宮はその後も長く存続し、奈良時代に常設の行宮として利用されたと思われる（称徳天皇が飽波宮に２日間滞在、２年後にも立寄り）。

【参考】http://www.geocities.jp/watsns/gpskgzrn.html

Ｃ．ＧＰＳ考古学からの筋違道（仮説）　　by Watson's Page（ワトソンのページ）

地元の元高校教師（物理専攻）がポピュラーな携帯用ＧＰＳを考古学に用い、『太子道は壮大な計画に基づいて造られ、驚くほど直線性のある古代の大道（日本最古の官道）であったことが明らかになり、また、北は斑鳩から南は飛鳥の甘樫丘の麓また聖徳太子の故郷「上宮」まで太子道が如何に続いていたのかを明瞭に知るに至った』と、インターネット上に報告しました（’11.12.3　’14.12.16）。100 回程度現地調査し、ＧＰＳ・解析幾何学を駆使し、地元の古老等の話を採集しての結論であり、かなり納得できる部分もありましたので、私なりに理解した概要を書きます。

●主な推理の進め方：

北部　●既存の直線生活道路などから、正確な太子道（直線）を決定し、その直線を外伸し、わずかに残った太子道痕跡との整合性を確認する。

南部　●わずかな痕跡 2 点から直線を仮定し、他の痕跡と矛盾しないものを太子道とする。

●結果：(ランダムに書きますが…)

１．太子道は安堵道、三宅道、耳成道、磐余道、飛鳥道（枝道として南横大路、岡本道)。

２．建設は推古天皇が耳成行宮に居住する時期に開始された。先ず磐余道・耳成道から開始され、飛鳥道は一番遅れて建設された。

（以下は主として太子道北部について書きます）

３．南横大路（斑鳩～高安）は、安堵道（高安～大和川・七重石塔）と高安で直交し、斑鳩宮などの建物の方向と中心軸と一致している。

４．　太子道は旧吐田・中窪田杵築神社間で大和川を渡った。（大和川はこの時代は大きく蛇行）

５．　大和川渡河後、油かけ地蔵の西を通って大和川にぶつかった所に橋（板屋ケ瀬橋）を架け、渡河して『阿土の館』迄続いた。

６．　新羅･任那よりの使人をこの『**阿斗河邊館**』で接待した（推古 618 年）

７．　太子道の狙いは斑鳩への『宮を結ぶ道』と『客人を接待する館への道』である。

８．　太子道は油かけ地蔵付近から一直線で田原本方面に向かう。

筋違道推定図（ＧＰＳ）

（文責　森 英雄）

2月度 正文 研修会 （斑鳩道）

2016.2.16